

# 親世代になるための準備教育の授業開発

## Developing preparatory classes for entering age of parenthood

川崎 雅子

千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻

本論は、子どもたちが親世代になるまでに必要な資質を身につけ、誰もが次世代の育成に積極的に関わることができるようになることを目的として、親世代になるための準備教育の授業を開発、実践し、その考察を行うものである。具体的には次世代としての乳幼児との関わりや、その親との交流、及び現在次世代育成支援を行っている人を知ることなどを通して、親世代に必要な次世代育成力を身につけるための授業プランの有効性を考察していく。なお、本文は筆者の修士論文を再構成したものである。

キーワード：授業実践、親世代、次世代育成、親子との連携

### 1. 問題の所在

#### 1.1. 虐待の背景にある親の孤立

近年、児童虐待が問題となっている。<sup>1</sup>山田は家族内の虐待や暴力として、親から幼い子どもへの虐待だけでなく、夫婦間の虐待、子から高齢の親への虐待なども含めた上で、児童虐待について次のように述べる。<sup>2</sup>

これらの虐待は、昔から存在しており、たまたまメディアが報道したから声が大きくなったという意見もある。しかし、従来は、これらの問題が存在しても、「例外的行動」つまり、一部の性格的に異常な人が起こすものであって、普通に生活している人とは無縁であると考えることができた。

しかし、現在では、児童虐待の相談件数が増えるだけでなく、普通に生活している主婦が「子どもにあたることがある」という形で、虐待を告白する人も出てきている。

山田は近年の児童虐待はこれまで無縁であると考えられていた、「普通に生活している主婦」が行っていると述べている。なぜ「普通に生活している主婦」が児童虐待を行ってしまうのだろうか。その背景と虐待の予防について厚生省（当時）がまとめた「健やか親子21」検討会報告書<sup>3</sup>（以下「健やか親子21」）には、次のように書かれている。

児童虐待の研究から、虐待では、（1）多くの親は子ども時代に大人から愛情を受けていなかった

こと、（2）生活にストレス（経済不安や夫婦不和や育児負担など）が積み重なって危機的状況にあること、（3）社会的に孤立化し、援助者がいないこと、（4）親にとって意に沿わない子（望まぬ妊娠・愛着形成阻害・育てにくい子など）であること、の四つの要素が挙っていることが指摘されている。このため、虐待を防止し、予防する方法としては、これらの4要素が揃わないよう働きかけることが効果的と考えられる。

この4点について検討してみると、「（3）社会的に孤立化し、援助者がいないこと」が解決されれば、他の3点も解決に至りやすいと考えられる。次にその理由を述べる。（1）は親が社会的に孤立していなければ、万が一親がどうしても子どもに愛情を注げなかつたとしても大人からの愛情が全く無いということは考えられない。祖父母や近所の人などから適切な愛情を注ぐことが可能であれば、愛情不足による傷が深くならずには済むはずである。（2）は周囲に相談相手や援助者がいればストレスを発散できる可能性が高まる。また、（4）のように子どもが非常に手がかかったり、子どもに愛情を持てなかつたりと言った場合でも他者が介入することによって、苦労が軽減されたり、特に専門家の介入によって少しづつでも子どもを可愛いと思えるようになったり、と解決の糸口を見つけられる可能性が高まる。以上のような理由から、まず「（3）社会的に孤立化し、援助者がいないこと」を解決することが重要であると考えられる。

## 1.2. 親世代になるまでの成育過程における孤立

では、社会的に孤立する親子をなくすためにはどうしたらよいのだろうか。子育てをしている親自身にどんどん外へ出るようにと伝えれば親は他者と交流を持つことになるだろうか。門脇は児童虐待が増加していることを受けて「若い親たちに、“人が嫌い”という性向が増殖しているというのが私の見方である。」<sup>4</sup>と述べている。つまり、親自身が「“人が嫌い”と考えてしまうため、親に外へ出るようにと促すことは難しいと考えられるのである。では親自身が「“人が嫌い”と考えるようになってしまった背景には何があるのだろうか。門脇の論を追っていこう。

若い親たち自身が、社会力<sup>5</sup>のおおもとになる他者への関心や愛着を培い育むために欠かせない営みである、多様な他者との直接的な交わりを経験せずに育った世代なのである。このため、無条件に「人が好き！」「子どもが可愛い！」と思う心性（メンタリティ）を欠落させることになり、そのことが、わが子を粗末に扱う（ネグレクトする）行為となつて現れているのだとみている。他者との付き合いを厭い嫌う親に育てられた子どもが他者への関心や愛着や信頼感を育んでいくとは思えない。

門脇は今の親世代が「多様な他者との直接的な交わりを経験せずに育った世代」であるがために、「他者への関心や愛着を」育むことができず、児童虐待をも引き起こしていると指摘している。子どもは成長する過程で多様な他者と関わることで他者との接し方、互いの社会的な位置や役割というものを学んでいくものである。そのため子ども期に多様な他者と接する経験がないということは多様な他者との接し方や、社会的な位置や役割について理解することができにくくなるということを意味しているのである。これは他者を理解し、共感することができないということにもつながる。

しかし、子どものほうから大人と接するということは難しい。従って、大人の側から子どもへの働きかけが必要となってくるのである。今のままで多様な他者と接することなく、他者に関心を持てなくなった親が子どもを育て、さらにその子どもが他者と接することなく育ち、ますます他者に関心が持てない大人が増えていく、という悪循環に陥ってしまう。そうならないためにも教育課程において、次世代を育成していくために必要な資質を身につける必要があると考える。

## 1.3. 企業における人材育成

次世代を育成するための資質は子どもを産まないと考えている人には必要がないものだろうか。先に、子ども期において多様な他者との触れ合いが必要であると

述べた。つまり、大人は、家族や親類、教員だけでなく、全ての大人が全ての子どもに対して育成する責任を持つものである。そのため子どもを産むか産まないかに関わらず次世代を育成するための資質を持っている必要がある。しかしそれだけではない。社会に出て企業で働くとき、企業を存続させるために次世代を育てていかなければいけない。次世代を育成するための資質とはこういったときにも必要な資質である。現代の企業では、人材育成としてOJT<sup>6</sup>という方法をとっている。しかし効率優先のもと、仕事内容が細分化され、一人ひとりの仕事の量が増えてきているため、若い社員の育成に手が回っていないのが現状である<sup>7</sup>。荒井が指摘するには、現代の業務が極めて細分化された職場では従来にも増してコミュニケーションがスムーズでないと、OJTは回らなくなっているにも関わらず、肝心なコミュニケーションは従来にも増して粗雑になっているということである<sup>8</sup>。しかも新しく入ってくる社員は上記で述べたように子ども期から多様な他者と関わることがなく、他者を理解し、共感することができなくなっている世代であるため、コミュニケーションが取りづらいと考えられる。玄田・佐藤は成長企業で働く個人へのアンケート調査と聞き取り調査を行い、「今後、労働市場の流動化が進み、これからは育成するにしてもコア人材に限定されるようになるという声もあり、育成から距離を置こうとする傾向は、ますます強まっている感じられる。」とした上で「しかしながら、人材育成を軽視しようとするならば、それは成長企業としてあきらかに誤った選択なのである。」と指摘している。その理由として次のように述べる<sup>9</sup>。

企業の経営戦略は、大別すると、事業戦略と人材戦略の2つからなる。第1章<sup>10</sup>の言葉を借りれば、企業は、事業戦略によるビジネスチャンスと、人材戦力が左右する組織の能力とが、たえず「不均衡」の状態におかれている。対応が不十分なために事業機会の抑制を選択する縮小均衡へと陥るか。それとも未知の機会に積極的に挑んでいけるのか。両者のうちの選択を規定し、それによって企業間競争を勝ち抜くことができるかは、結局のところ、事業機会をよく理解し、それに適合した人材がいるかどうかにかかっている。会社独自の事業戦略にすばやく柔軟な対応するためには、会社自体が人材の育成に積極的に取り組むことが求められる。

つまり、OJTを用いた人材育成は一見非合理で指導者にとっては苦労を要することであるが、長い眼で見れば企業の存続に人材育成は欠かせないものなのである。人材育成には指導者の育成するための能力も必要であるが、まずは苦労や非合理的を乗り越えて若手を育成しようという意欲が必要なのである。

## 2. 授業プランの開発

### 2.1. 親世代になるための準備教育とは何か

先に現代は、親の孤立、子どもの孤立及び人材育成の問題があることを挙げた。これらの問題が解決されなければ、一人前の大人になれない大人が増加し更にその子どもを一人前に育てることができないという悪循環に陥ることになる。そこでこれを解決するためには親世代になるために必要な資質を育成することが考えられる。これを親世代になるための準備と捉え、教育課程において行われるべきであると考えた。本研究においてこれを親世代になるための準備教育と名づけることにする。

また、便宜上親世代という言葉を使ったが、これは親になるための準備のみを指すものではない。親世代とはすなわち親になるくらいの年齢と考える。全体的に見れば「親・子・孫と続いてゆくおののおのの代。親の跡を継いで子に譲るまでのほぼ30年を1世代とする。(広辞苑第五版より抜粋)」という定義を用いて考えることもできる。この定義で言えば親世代とは30歳~59歳までを指していることになる。但し個人を見たときには必ずしもこの定義が当てはまるものではなく、20代で親になる者は多いし、1.3.で挙げた企業の人材育成についても20代の先輩社員が後輩社員を指導することは多分に有り得る。のことから、何歳から親世代と定義することは無意味であると考え、定義はしないことにする。では具体的にはどのような準備をしておくべきなのだろうか。それは次世代を育成する力、すなわち次世代育成力を養うことであると考える。

### 2.2. 次世代育成力とは何か

では次世代育成力とはなんであろうか。これまで次世代を育成することが必要であるがそのための力がないまま大人になる人が増えていると述べてきた。それでは次世代を育成するために必要な力とはそもそも何であろうか。金田は保育教育で育てる力を一言で表現すれば、「次世代の育成の力」<sup>11</sup>であるとし、更にその力は「次世代のみならず異世代<sup>12</sup>と発展的にかかわる力の育成である」とした上で次のように述べている。

したがって、保育教育で身につけたい力とは、先行する世代や同世代とかかわり学びつつ共につくり出してきた文化を次世代に伝授しつつ共に新たなものを作り出し、また次へつなげていく、という一連の縦のつながりを担える力量ではないかと考える。

金田の主張を踏まえた上で次世代育成力を備えている人はどのような人であるか考えていく。金田は「先行

する世代や同世代とかかわり学びつつ共につくり出してきた文化を次世代に伝授しつつ共に新たなものを作り出し、また次へつなげていく、という一連の縦のつながりを担える力量」と述べている。

まず、「先行する世代や同世代とかかわり学びつつ共につくり出してきた文化を次世代に伝授していく」ということは次世代との関わり方を理解して、次世代に伝える力が必要である。つまりコミュニケーション能力を有している人であると言える。ただし、コミュニケーションと一言で言っても、世代によってコミュニケーションのとり方が異なるため、次世代に対するコミュニケーション能力を持つている必要がある。しかし、次世代に文化を伝えるためには先行世代から文化を受け継ぐ必要がある。つまり単純に次世代とコミュニケーションをとると言っても次世代としか関われない、ということではないことは注意しておく。

また次世代に合わせたコミュニケーションをとるためには、次世代の成長過程に関する知識が必要である。この知識は従来の家庭科で教えられてきたものも含め様々あるだろう。その中でもどのような知識をつけるべきかというと、次世代が育てられるべき存在であるということを理解できる知識である。要するに、先行世代に比べ、次世代はある部分が未熟であるために、先行世代が支え、教え、導く必要がある。そしてそれは先行世代から見ればしばしば苦労や負担を伴うことがある。知識をつけるというのはそういった苦労や負担を伴うのだという心構えができているということが大切である。例えば、金田が「世代によって、課題になっているところが異なる。したがって互いの欲求がぶつかり合うことがある。」とした上で次のような例を挙げている。

たとえば、乳児期の後半になるとティッシュペーパーを箱からどんどんひっぱり出すのが好きになる。これは子どもにとっては、使えるようになった指を大いに使いたくその活動自体が楽しくて仕方がないという遊びそのものであり、少しも悪いことをしているわけではない。大人から見ると、もったいないし散らかるということになり、こうしたことを行なうことを「イタズラ」と呼んでいる。こうしたとき、子どもの思いに共感しながら大人の思いをどう伝えていくかが保育の思想と不可分に結合している技術だといえる。

大人から見ると、イタズラに見えてしまう行為が、乳児にとっては発達のために必要な作業ということがある。知識というと「乳児期の後半には指が使えるようになり、それを使った遊びをするようになる」ということのみ教えることだと捉えてしまいがちだが、そういった知識だけを中学生に教えても中学生はすぐに乳児と関わるわけ

でもないし、子どもを産むにしても遠い将来のことで意味はない、と考えて忘れてしまうだけである。そのため、それよりも重要なのは、世代が違えばそういう欲求の違いが多分にあり、それは主に次世代、ここで言えば乳児が未熟な状態にあるという理由から生じていると大きくとらえ、こういった事態に対する心構えができるということである。心構えができていればそういった「イタズラ」を見てすぐにイライラしたり、未熟な者と接することに対してかなりのエネルギーと時間を割いたりすることの精神的負担を軽くすることができる。

また、成長過程を学ぶ必要があるのは乳幼児についてだけではない。先に述べたように、次世代育成力は子育てについてのみ必要な能力ではない。企業での人材育成においても必要である。そのため、この成長過程に関する知識は乳幼児に限ったことではなくて、小・中学生になんでも、更に社会人になんでも必要なことである。

それでは上記の2点を持っていれば次世代育成力を持っていると言えるだろうか。しかし、コミュニケーションをとる能力があったとしてもそれを發揮しようとする意欲がなければ發揮することはできない。つまり、次世代と積極的に関わり、次世代を育成していこうという意欲が必要である。次世代と関わるということは簡単なことではない。年齢が違えば違うほど関わる場もなければ、関わるために話題もないからである。これは、何も若い世代と話すために若い世代の趣味に合わせ、話を合わせるということではない。それでは違う世代と交流する意味を激減させてしまう。自分よりも下の世代の人は話が通じないからと言って話したくないと思うではなく、世代が違えば知っていることも違うのが当たり前だという心構えを持って接しようという意欲が必要だということである。現在自分たちの世代が持っている文化<sup>13</sup>は次世代に受け継いでいかなければ次世代が知らないで当然である。次世代に伝えていくことによって、場合によっては先行世代が築き上げてきたものが変化していくこともあるだろう。しかしそれも必要なことである。何でもありのまま受け継いでいくだけでは社会は発展していかないからである。

### 2.3. 中学校段階で行う意義

なぜ中学校段階で実施するかということについては次のような理由がある。今回の授業は親子になるための準備を目的としているものではないが、親が子どもを育てることについて言及することは避けられない。このことは自然と自身の育てられている現状を見直すということにつながるはずである。中学生は思春期に向かえ、親との関係がうまくいかなくなる時期である。当然のことだがどうしても親に反発してしまう。親を疎ましく思ったり、不必要に怒りをぶつけてしまったりするようなことも多々あることが予想され、親を大切に思ったり感

謝したりすることを忘れてしまいがちである。そのときに親が自分を育ててくれたことを見直すきっかけがあるということは非常に価値のあることである。親が自分を育てたときにどのような苦労があったのか、またどれほどの喜びを感じていたのか、直接自分の親から聞かずとも、現在子どもを育てている親の話を聞くことで自分たちも深く考えることができるはずである。こういった理由から中学校段階で実践することにした。

### 2.3. 授業プランについて

#### 2.3.1. 授業の組み立ての工夫

では本実践における授業プランについて考えていく。先に児童虐待の背景にある親の孤立化、子ども期における大人との関わりの無さなどを挙げた。ここでは、これらの問題を踏ま上で次世代育成力を育むカリキュラムについて考えていく。

次世代育成力の次の3つの資質を確認しておく。

- ①次世代と関わるコミュニケーション能力
- ②次世代の成長過程に関する知識
- ③次世代と積極的に関わろうとする意欲

ただし、今回の授業のみにおいて、この資質を完全に養うということは不可能である。これらの資質は教育課程全体を通して身につけていく必要があるからである。

①について考えていく。次世代と関わるコミュニケーション能力を育成するということであるがここでは次世代をどこの世代に位置づけるかということが問題となる。本研究においては次世代とは乳幼児を指すということではなく同世代内でも相手が新参者である場合は次世代を育成するということを意味する。しかし、中学の後輩などとは部活等々で接する機会が多くあるため、次世代として捉えやすくななかな接することができない乳幼児とのコミュニケーションについて考えていくことが望ましいと考えた。

また、次世代を育成するということは、先行世代が作り上げてきた文化を受け継いでいく作業である。そのため先行世代と接し、話を聞いて自分の中に落とし込んでいくという作業が必要であると考えられる。

以上のことから、乳幼児との触れ合いは保育所などで触れ合うのではなく、実際にその子ども達を育てている親からも話を聞くことが望ましいと考える。また、それだけでは親としての次世代育成についてしか学習できない。そこで、現在、親以外の立場で次世代育成をしている人たちからも話を聞くことにしたいと考える。

では、親以外の立場とはどのような立場が適当であろうか。筆者は地域の一人という立場、及び企業で働く一人という立場での話が適当ではないかと考える。なぜならば、人は常にどこかの地域の一人として生きていくことになる。そうであれば地域での次世代育成支援には少なからず関わっていくはずであり、そうなることを目的

としている。また、多くの生徒はいずれ社会に出て企業で働くことになるだろう。企業という単位でも次世代を育成する責任があるため、企業での次世代育成も生徒の将来にもつながってくことになる。以上のような理由から地域に住む一人及び企業で働く一人として次世代育成を支援している方からお話を伺うことにする。

②について考えていく。①で次世代の中でも乳幼児との触れ合いを行うことが望ましいと述べた。本実践では中学2年生で授業を実施するため、保育の授業もやっていない学年である。乳幼児の成長過程については、かわいいというだけで終わらないように、また現代の問題として児童虐待があることから、児童虐待の背景にあるものを含めた育児の苦労する点を理解させるということが良いであろうと考える。

では③について考えていく。次世代と積極的に関わろうとする意欲を持つことは、自分達にも次世代を育成していく責任があることを理解し、それが魅力のあることである必要がある。これは①と同じように現在次世代育成の取り組みをしている人から、その責任と魅力を伝えてもらうということで達成できるものと考える。

以上のことを踏まえて筆者は千葉市内の中学2年生1クラスで授業を行った。授業プランは下記の通りである。

1時間目：乳児の発育及び成長に伴う苦労を知る（発育の様子がわかるビデオ<sup>14</sup>、親へのインタビュービデオ<sup>15</sup>を使用）。虐待はなぜ起こったのか考える。

2時間目：1時間目の続き。現在行われている地域の取り組み紹介。

3時間目：親子との交流（クラスが8班に分かれているため8組の親子に来ていただいた。）

4時間目：地域の取り組み紹介としてCHI-PAPPA<sup>16</sup>の方に来ていただいた。

5時間目：企業の取り組み紹介として学校の近くに本社があるイオン株式会社の方に来ていただいて話を聞いた。

6時間目：次世代育成とは何か。なぜ次世代育成をする必要があるのか考える。

7時間目：自分達にできる次世代育成プランを考える。

### 3. 本研究の成果と課題

#### 3.1. 本研究の成果

本研究の目的であった、次世代育成力を養うことができたかどうかについて次世代育成力としてあげた3つの資質について考察していく。

##### ①次世代とのコミュニケーションについて

授業の中で次のような場面があった<sup>17</sup>。

親にインタビューをしている最中、女子2人は笑顔でうなずきながら聞いているが男子2名はあまり顔も上

げず興味がなさそうな様子である<sup>18</sup>。しかし、話をしている途中で、2歳の男の子が生徒の消しゴムをいじり始め、口に入れそうになったのをA（女子）が取り上げたが、中身だけが出てしまい、カバーをりょうすけくんが持ったままになっていた。すると、それまでは子どもと関わろうとするそぶりを見せていなかつたC（男子）が手を出し、男の子からカバーを受け取るときは顔がほころんでいた。その後Cは男の子に対して反応しそうでしない様子から照れがあつてなかなか子どもと関わることができないように見えた。そのときからD（男子）も覗き込むように男の子を見るようになり、少し笑顔も出てきた。お母さんが男の子に「カバー返してね」と声をかけるとD以外の3名が我に返ったように次の質問者のAに質問を促すようなそぶりを見せ、Aも質問内容についてB（女子）に確認をしていた。その間も一番端にいたDはじっと男の子の様子を見ていた。インタビューが終わる時間になつてもなかなか消しゴムを手放さない男の子にお母さんが何度も「ありがとうって言って返して」と声をかけ、つたないしゃべり方で「ありがと」と言ってCに渡すと、生徒は4人とも笑顔になった。お母さんが「バイバイして」と男の子に声をかけると（映像には映っていないがおそらくバイバイしたのだろう）生徒もみんな手を振り、女子2名に加え野口くんも声に出して「バイバイ」と言っていた。

この短い時間の中でも子どもとの触れ合いを通して生徒の様子が変化していることがうかがえる。女子生徒は始めから比較的乳幼児との触れ合いができるていたが、男子生徒は照れがあるのか慣れていないことによる戸惑いからか、始めはあまりコミュニケーションがとることができずにいた。しかし子どもが笑顔で接てくるのを見て、つい自分達も笑顔になり、最後には声をかけられるようになっていた。

この後赤ちゃんを抱かせてもらった時も上記の2名の男子生徒は積極的に赤ちゃんの様子を見たり、一緒に遊ぼうとしたりする様子が見られた。

今回のコミュニケーションでは言語を用いたコミュニケーションのみではなく、非言語のコミュニケーションをとれるようになることも重要な要素であった。声をかけることがなかなかできなかったとしても、例えば、乳幼児と話すときに目線を合わせる、笑顔で接するなどができることが必要であった。前者に関してはもともと今回実践を行った教室は基本的に床に座っての授業だったので、幼児と接するときに意識して眼をあわすという必要がなかった。後者に関しては先の授業の様子にもあるようにほとんどの生徒は子どもに対して自然に笑顔になっていた<sup>19</sup>。

##### ②子どもの成長過程について理解できたか

今回の授業では、実際に親から育児の苦労について話を聞くこと及び実際に乳幼児を見ることを通して、子どもの成長過程について理解できたと考えられる。例えば1時間目にビデオで子どもの発育過程と親のインタビューを見せたときの感想では「子供を育てるのは大変だと知っていたけれど、自分が思った以上に、もっと大変なのだと思います。」「自分の子供の世話をしている親の様子をあまり見たことがなくて、今日ビデオを見て、すごく大変そうだなあと思いました。」「赤ちゃんはわるぎはなくてもめんどくさいと思ってしまうと思います。赤ちゃんを生むという事はそれなりにかくごをしないといけないんだなーと思いました。」というように育児はこれまで自分が考えていたよりも大変なもので覚悟が必要であるという感想を持った生徒は33名中（1名欠席）25名いた。他の生徒に関しては1時間目のもう1つの活動でネグレクトの事件を扱っているので、そちらについての感想を書いてきた生徒である<sup>20</sup>。また、ただ単に育児は親が大変、という視点だけでなく子どもの成長過程に着目した感想は「立つのは何才からとか、すぐ泣くとか、言葉が通じないとか、とにかく赤ちゃんを産むと言うことは大変なことだと改めて思いました。」「育児は思ったより大変そうでビデオを見て、夜泣きが激しいということを聞き、ストレスはたまるだろうなと思った。」など7名の生徒が書いてきてのことから、親が苦労しているという話を受けただけではなく、子どもの成長過程も理解できたと解釈できる。また、これは実際に親子と会って親から直接話を聞き、子どもと触れ合うという活動を通したことによりよく理解されたと考えられる。例えば「実際にインタビューをしていて、子供がいると自分中心ではなく、子供中心になってしまふので、親が家から出ることができなくなつて大変だと思った。他にも夜泣きで寝れない日が続くのはかわいそうだと思った。」1時間目ではインタビューを受けた親が、「育児は大変です」と言いながら話をしてくれていたのを受けて、生徒達も「大変なんだな」と感じたのかもしれないが、実際に自分達が親から話を聞いてみると「大変だと思った。」というだけでなく具体的に大変なことが書かれたり、「かわいそうだと思った。」と共感できたと考えられることが書かれていたりする。また、「子供はすごくかわいいけどいつも見てなきやいけないから大変だと思いました。」という感想に見られるように、大変さを感じつつも子どものかわいさを感じている様子がわかる。しかし、これまで苦労を中心に学んできたことで子育ては苦労するものだ、と偏った考えを持ってしまったとも言える。そこで、事前に親に子育ての苦労だけでなく、幸せなことについても話してもらうようにお願いをしておいた。生徒の感想には「2組のお母さんにいろいろな質問をしたけど、2人とも困ったことなど言いながらもとても幸せそうな顔をしていまし

た。」「話を聞いていると、夜起きなくてはいけなかつたり、自分のペースで動けなかつたりして、とても大変そうだなと思いました。しかし、話をしている方の顔を見ていると、とても幸せそうで、子供のことがすごく大切なんだろうと思いました。」「大変なこともあれば幸せなこともたくさんあると聞いて少しうらやましく思いました。」「前までの授業で、子育てはとても大変だと思っていたけど、インタビューしてみると、大変だけど、楽しんでやれば楽しくなると言っていて、確かにそうだなと思いました。」というように実際に話を聞いてみるとその表情や子どもに対する接し方から、苦労があつてもそれを超える楽しさや喜び、幸せがあるのだということを感じられていることがわかる。

そして親だけでなく子どもと触れ合えることで、子どもの未熟さを肌で感じたり、自分のこととして経験したりすることができる。例えば「2才の男の子とあそんでみたけど、ちょっと目をはなすと、ずいぶん遠い所まで行っていてびっくりした。行動がわからないので、なにをするかわからない不安もあった。」という感想があった。広めとはいえ一つの教室内での活動なので、「ずいぶん遠い所まで行っていてびっくりした」というほど遠くはないはずなのだが、これは子どもの行動があまりにも予測がつかなかったことへの驚きが含まれていたからだと考えられる。他にも「最初にみた2才の子はなんとなく言葉が通じて一緒に遊んでくれたけど、0才の子は一瞬笑うけど泣いてばかりでした。ミルクを飲ませるにも、お母さんじやなきやいけないことが分かりました。前にも妹をだっこしたことは何回もあったけど、最初は軽かったけどずっとだっこしているうちにすごく重くなりました。泣きやんてくれないし、あばれてさらに重くなるし大変でした。」という感想があった。2歳の子と0歳の子の違いも知ることができることや「ミルクを飲ませるにも、お母さんじやなきやいけないことが分かりました。」ということは実際に乳幼児とその親と触れ合えたために気付けたことである。これは授業の途中でおなかがすいて泣き出しましたがおり、お母さんがミルクを飲ませていた際にお願いして生徒にミルクをあげさせてもらうことになったが、生徒に交代したとたん子どもが泣き出しましたということがあって書いた感想である。これは子どもだけでなく、それぞれの親がいて、違う月齢、年齢の子どもたちが来てくれたということによる効果である。他にも子どもと触れ合ったからこそ感じ取れた子どもの成長過程について書かれた感想を紹介する。「言葉がしゃべれないからなぜ泣いているかわからないとか、なんでも口に入れてしまうとか…。赤ちゃんが来てくれたおかげでその大変さがわかりました。」「今日は赤ちゃんがきてくれました。とてもかわいかったです。だいてあげたときいきなり首がガクンとなつたときは首の骨がおれたかと思つ

てびっくりしました。(生活記録より<sup>21</sup>)」「今日は3時間目に赤ちゃんがたくさんきました。頭がやわらかかったのでおどろきました。(生活記録より)」「今日は実際に小さい子どもが来ました。子どもたちはすごく柔らかいのですごくだっこをするととても不安定でした。(生活記録より)」という感想からうかがえる。「最初にみた2才の子はなんとなく言葉が通じて一緒に遊んでくれたけど、0才の子は一瞬笑うけど泣いてばかりでした。」こういったことから実際に乳幼児に触れ合うこと、またそこには親にもいてもらい親の話も聞けるということは子どもの成長過程を理解する上で非常に重要なことであったと解される。

### ③次世代育成への意欲を持つことができたか

実際に乳幼児と触れ合ったことや、企業の次世代育成支援について聞いたことが、次世代と積極的に関わろうという意欲を持たせることに有効だったと考えられる。例えば事後アンケートで「今回の授業で理解できたこと」という自由回答の項目で「僕達のために、企業が支えてくれていること、色々な方法で未来の子供達を救えること。」と書いた生徒が授業全体を通しての感想の中で「子供の事に関しては、今まで自分が子供だったので、全く気にしなかったが、この授業を受けてから、自分の思っていることが、すごく変わったと思います。そして僕達は色々な大人や企業、たくさんの人の協力を得て、育てられているんだとも思いました。今回は短い間でしたが、とても良い経験になりました。本当にありがとうございました。」というように書いている。企業における次世代育成支援について具体的に知ったことで自身の成長の過程を振り返ることができたとともに既に「子ども」ではなくなりたった自分と「子ども」との関わりを意識し始めたことがうかがえる。また、「授業の全体を通して子どもと遊ぶことが楽しくなりました。自分はひとりっこなので小さい子と遊ぶ機会はあまり持たないけどこの授業を通してそういうことができて良かったと思いました。これで子育てについての授業は終わってしまうけどこのようなニュースが出てきたら(ネグレクトなど)がでてきたら興味が持てるようになったと思います。」という感想からは、きょうだいのいないこの生徒にとって、年少の子どもと遊ぶ経験が非常に貴重なものだったことがうかがえる。

他にも「最初は育児なんて、まだまだ先のことと思っていたけど、この授業を通して育児に興味を持つことができたし、私達は次世代を支援しなければいけないことが分かりました。どんなに小さいことでも、協力してやっていけたら、いいと思います。」「私はこの授業を通して、子育ての大切さが、とても分かりました。「別に今自分に子供がいる訳じゃないし…」という考えが最初はあったけれど、今の自分にも、とても関係あることだ、

という、そういう考えをもてるようになって良かったです。また機会があったら、こういう授業をしてみたいと思いました。」という感想からわかるように、これまでには子どもの育ちの支援を全く関係ないものとみなしていた生徒が、授業を終えて自分達にも子どもの未来に責任があるということを意識した様子がわかる。更に後者の生徒は「今回の授業で理解できたこと」については「人の命の大切さ、未来の大切さ」という回答もしている。

また、「子育ての授業を受けて、未来への子どもたちのみかたが、大きく変わりました。未来の子どもたちのためにも、今からでも支援などに協力していきたいなと思いました。」「今、何ができるか、何をするかは未来を変えると思います。こんな風にほつといたら未来の人たちも苦労すると思います。なので、今何ができるかをやってみて、みんなと一緒にボランティアとかをやってみて良いと思います。(原文ママ)」など未来に産まれてくるであろう自分達の子どもや孫に目を向け始めた生徒もいた。

更に次世代育成に貢献する様々な立場の人や施設を紹介したことで「私は今まで次世代のこととか、あまり考えたことがなかったけど、考えてみると、次世代のためにいろいろがんばっている人はたくさんいるんだなと思いました。私はまだ自分で募金をしたりすることはできないけど、町にゴミが落ちてたら拾ってゴミ箱に捨てるとか、簡単なところからやっていければいいと思います。」という感想に見られるように、「次世代のためにがんばっている人の姿」が自分の意欲につながっていることもわかる。

具体的に意欲が出始めているように見える記述としては、事後アンケートの感想に「今日の授業では、自分たちでできることを考えました。(原文ママ) 地域などでできることは、たくさんあると思うのでそういう活動に積極的に参加したいです。今まで子育てについていろいろな授業をやってきたけどとても奥が深いなと思いました。今、地球温暖化が問題になっているけど少しでも温暖化に対してこうけんできるといいと思います。」と書いてきた生徒が生活記録に「今日は、子育ての授業が終わりました。僕の家のとなりに1才ぐらいの小さい子どもがいます。この授業をとおして小さい子が気になりました。(生活記録)」と書いている。このことから、漠然とした子どもという対象のためでなく具体的な子どもの姿がこの生徒には見え始めたことが解釈できる。これは子どもに関わろうとする意欲が見え始めたと言つてよいだろう。

以上のようなことから、本研究において実践開発した授業プランは次世代育成力を養うことのきっかけとして有効であったと結論づける。

### 3.2. 今後の課題

最後に今後の課題について 3 点述べる。

1 点目は活動の流れについてのさらなる検討である。今回は 1 つの班が 2 組の親に話を聞いた後に、乳幼児と交流を行った。しかし、最初に親にインタビューする際に、生徒は照れや戸惑いを隠せず、親の話に相槌を打ったり、つっこんでインタビューしたりすることができない生徒が多かった。また、親も生徒も子どもがどこに行ってしまわないか常に注意を払っていなければならずインタビューに集中できない場面もあった。これは、子どもから目が離せないという大変さを実感する上では良いことであるが、親から話を聞くということも疎かにはできない活動である。こういったことを考慮すると、先に子どもと触れ合うことで生徒の緊張を和らげた上で親にインタビューを行えば、インタビュー中に親だけが子どもの相手をするのではなく、生徒達も子どもの相手をしながら話を聞くということができるのではないかと考えられる。もしくは、クラスの半分は先に子どもと触れ合い、もう半分は後で触れ合うということにすれば、子ども達のことがさほど気にならずにインタビューに集中することができるだろう。

今後はこういったやり方を検討していく必要がある。

2 点目は次世代の成長過程についての学び方のさらなる検討である。本研究では実際に乳幼児に触れ合い、育てている親の話を聞くことが子どもの成長過程を理解する上で非常に重要なことであることが明らかとなった。しかし、子どもの未熟さを親の苦労という点から理解させることは今後検討が必要である。次世代を支援するよりも親の子育ての苦労を軽減する支援ということに話が言ってしまう恐れがあるからである。事後アンケートで授業全体を通しての感想を書いてもらったが、1 名の生徒が「最初は子育てと聞いて、子供の育て方とかを教わるのかと思ったけど、それだけじゃなくて、子供より、親に注目していておもしろかったです。」という感想を書いていたことからも注意が必要なことがわかる。

ただ、今回は、授業実践の対象を中学生にした理由として、以前に書いたように思春期のこの時期に親が自分を育ててくれたことについて改めて考えることができるなどを期待したことがある。そういう意味では先の 1 名も先に引用した感想に続けて「これからは、自分を一生懸命育ててくれたお母さんとかを、もっと大事にしないといけないなーと思いました。」と書いていることから、期待した効果は得られたと考えられる。親の育児の苦労という点から子どもの未熟さとそれ故の失敗を大目に見られる心構えを持つことは意味があることだといえる。

こういった利点を残しつつ、親の苦労という面のみに話がいかないように検討していく必要がある。

3 点目は教育課程全体を見通したカリキュラムの開発である。本研究では教育課程全体でつけていくべき次世代育成力を効果的に養うための中心的な授業プランとして開発している。今後は他教科、行事、部活動との連携や、近隣の小学校などとの連携の仕方を考えていく必要がある。全てにおいて新しいことを行うというのではなく、現在既に行われていることも、今回の授業を中心に次世代育成力を育む視点を含めて再構成していくことで、その効果は得られるであろうと考える。例えば、7 時間目に次世代への支援として生徒から「小学校に部活などを教えに行く」という意見が出ているため、今後は部活動及び小学校と連携し、生徒自身で小学生に何をどのように教えるべきか考えて教えにいくようになるなどの活動を取り入れていくことができる。本研究の最終目的は教育課程全体を親世代になるための準備期間とした上で次世代育成力を養い続けていくことができるカリキュラムを開発することであるため、今後は学校全体で協力しながら教育課程全体を見通したカリキュラムを開発していくことが必要である。

<sup>1</sup> 厚生労働省「平成 18 年度児童相談所における児童虐待相談対応件数等（平成 18 年度社会福祉行政業務報告）」

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/index.htm>  
1

<sup>2</sup> 山田昌弘『迷走する家族』有斐閣、2005、P69

<sup>3</sup> 健やか親子 21 検討会報告書（2003）

[http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1\\_c\\_18.html](http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_c_18.html)

<sup>4</sup> 門脇厚司『親と子の社会力 非社会化時代の子育てと教育』朝日出版社、2003、P118

<sup>5</sup> 社会力とは、門脇の造語である。「端的にいえば、社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力のことである。」（「子どもの社会力」岩波新書、1999、P61）

<sup>6</sup> OJT とは On-the-Job Training（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）の略である。フリー百科事典 ウィキペディアによると「企業内で行われる職業指導手法の一つで、職場の上司や先輩が部下や後輩に対し、具体的な仕事を通じて、仕事に必要な知識・技術・技能・態度などを、意図的・計画的・継続的に指導し、修得させることによって、全体的な業務処理能力や力量を育成するすべての活動である。（中略）これに対し、職場を離れての訓練といった意味で Off-JT という言葉があるが、こちらは日本の教育サービス関係企業がつくった 和製英語である」（<http://ja.wikipedia.org/wiki/OJT>）と書かれている。

<sup>7</sup> 平成 19 年度国民生活白書、P179

<sup>8</sup> 荒井千曉『勝手に絶望する若者たち』幻冬舎、2007、

---

P96、P104

<sup>9</sup> 佐藤博樹・玄田有史『成長と人材—伸びる企業の人材戦略—』勁草書房、2003、P137

<sup>10</sup> 第1章 成長戦略と人材ニーズ 高橋徳行

<sup>11</sup> 金田利子編著『育てられている時代に育てることを学ぶ』新読書社、2003、P14

<sup>12</sup> 前掲 P14 ここでいう異世代は「異世代とは、一般的には、子ども世代・親世代・祖父母世代…というように、人が生まれてから大人になるまでの約20年間を一世代としたとき、異なる世代をさす。さらにもう一步広げて考えたとき、同世代においても自分と異なる、異年齢・異発達・異性・にまで視野に入れてとらえられる。」としている。

<sup>13</sup> ここで言う文化とは「③ (culture) 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。(以下略)」(広辞苑第五版) の意味で使われている。

<sup>14</sup> 株式会社インタービジョン「赤ちゃんのいる暮らし毛利子来の育児相談」を筆者が10分程度に編集したものを使用した。

<sup>15</sup> 1才3ヶ月未満の子どものいる4組の親に子育ての苦労などについて筆者がインタビューしてまとめたもの。

<sup>16</sup> 個人で運営している、就学前の子どもと親が遊びに来られる施設。施設の周りには畠や手作りの小さな砂場があるような場所である。

<sup>17</sup> 授業を実施した際に記録として撮影していたビデオを元に記述している。

<sup>18</sup> このクラスは7つの班が4人、1つの班が6人である。

<sup>19</sup> 「ほとんど」と書いたのは記録したビデオに全員が映っていないためである。

<sup>20</sup> ただし、両方について書いている生徒もいる。

<sup>21</sup> 生徒全員が毎日の日課や1日の感想、日記を書くノート。